ドイツ古典哲学の言語観

——フィヒテ，フンボルト，ヘーゲル，フォイエルバッハ——

武井勇四郎

一

言語は言語学者だけの研究対象であることはなかった。ギリシア哲学から今日の言語分析の哲学に至るまで，それぞれの時代の背景とそれぞれの哲学者の哲学体系や理論を反映した言語観が存在している。このことは人間思考の本性，思考の所産である知識の本性が言語と切っても切れない不可分なつながりをもっていることを物語っている。認識思考の本性，既成知識の本性，および両者の関係をどのように摑むかによって，言語は言語でその本性がそれぞれの哲学者によって色いろに究められてきたのである。古代の哲学者の研究はさておいてF・ベーコンを初めとするイギリス経験論の潮流は，言語の見解においてもドイツ古典哲学の潮流と大変異なっている。そしてまた論理実証主義とか分析哲学の名で知られている言語分析は，もっぱら言語現象(フエノメナ)，言語形成物を対象としていて別の発展をたどっている。なおその上最近の情報理論は言語の考察・研究にとって新しい見地を提供している。

マルクスは言語哲学なるものを遺さなかったし，言語についての所見は『ドイツ・イデオロギー』に散在するだけである。このことがマルクス主義の言語哲学にたいする関心を喚び起こさなかった，あっても否定的なニヒリスチックな態度しか取り得なかった。他方，スターリンは『マルクス主義と言

語学の諸問題』(1950) なる毒物を遺した。これに当てられた代弁哲学者は西欧育ちの意味論，記号論，記号論理学，数学論理学などの門に一歩も踏みいらずに若手研究者の眼前に鉄のイデオロギー・カーテンを張りめぐらしてそれらの諸科学をブルジョワエセ科学として頭から拒否したのである。動脈硬化した「マルクス主義」はイデオロギー崇拝の偶像物にはなったが石女となった。ウィーン学団やリボスコワルシャワ学派にいかなる宝庫があるかをみきわめるにはカーテンの隙間からこそこそ覗きこむだけでは不可能である。それにはカーテンが取り除かれて眼の前で宝庫の扉を開いて紛い物と本物の宝とをよりわけなければならない。事実科学技術と産業の発展はこのイデオロギーのカーテンを取り払うことに成功はした。しかしこの宝庫には，サイバネティックスの実践的および理論的発展にとって，科学方法論の確立にとって全部が全部貴重なかけがえのない宝ばかりで満たされているわけではない。と言って彼等の達成成果にたいして頭から虚無的態度をとることは反マルクス主義的である。むしろ内に入って内在的批判が要求されるのである。

他方，サイバネティックスは情報の見地を言語に拡大し，言語の情報的側面の分析研究において一大成果を挙げている。しかしこれはあくまでも言語物質の技術工学的ないしは数学的処理の成果であって，認識する思考の本性それ自体を究明し尽した成果では決してない。ところがせっかちな哲学者は情報と言語を同一視する，ひいては言語記号の操作の法則と認識思考の弁証法とを混同するのである。イギリス経験論は概して言語の外的側面，つまり記号，符号という言語物質外被を，ドイツ哲学は言語の内的側面，つまり思考，思想，精神活動，世界観を究明していた。この両側面を分裂において摑える時，一方において，言語記号の操作が，すなわちすでに対象化を完了した思考の所産たる既成知識の操作が，新しい知識の創造，創造的知識と見間違えられる。情報という言語物質の加工の法則が思考の法則とすり替えられる。つまり悟性が理性に暴力を加えるのである。論理実証主義と高速度電子計算機の威力，自己組織機器(システム)の威力に惑わされた現代版の人間機械論である。

これはイギリス経験論の流れにその源流を求めることができる。

他方において，理性(ロゴス)は言葉(ロゴス)，民族精神は民族言語，ひいてはシンボル形態が文化の総体，世界観とみる流れがある。ドイツ古典哲学である。

ヘルダー，フィヒテ，フンボルト，ヘーゲル，フォイエルバッハの言語観を論述するに先立ってイギリス経験論のそれを大雑把にスケッチしておこう。その方がドイツ古典哲学の言語観を浮彫りにするのに好都合である。

二

F・ベーコン(1561～1626)は『ノヴム・オルガヌム』(1620)のなかで言語についてドイツ哲学の立場と大きく異なる見解を述べている。それは一口で言えば帰納法と演繹法との違いに根ざしているイドラとロゴスとの違いである。彼によれば，言葉は概念の合札や符号であり，したがってそれと内容上同一である。つまり一般命題，抽象概念，通俗概念と同一なのである。論理学，三段論法，知識は語から成る命題の集り組合せである。しかし，経験，感官，実験データのみを唯一の確実なもの，帰納法の基底とする経験偏重の立場からすれば，概念，観念は感官から最も遠ざかったもの，それに直接拠っていないものである。感官に拠った直接的知覚による概念は信用のおける確実な知識であるが，「その他すべての概念は錯誤であって，事実から正しい方法によってひき出されつくり上げられたものではない[1]。」したがって抽象的，一般的概念は人を欺く，知性に暴力を揮う。要するに抽象概念と内容上同一である言語は人をだますのである。既にプラトンは『ゴルギアス』の中で言論，相手を打ち負かす弁論は真の知識に導くものでないと述べていた。言語は相手を要求するコミュニケイションの手段，人の集まる市場においてとりかわされる手段として用いられる。したがってベーコンにあっては「市場のイドラ idola fori」とは言語の欺きによるものであって，「すべてのもののうちでもっともやっかいなものであって，いわば言語と名称の同盟によって知

性に侵入したものである。[2]」 言語がもちこむイドラは人間精神の空虚な臆断，勝手気ままな抽象の産物，実在性のない名称，虚構，混乱した実在の名称，普遍名称の形で現われる。彼はイドラをイデアから厳格に区別して，後者を真実のしるし，神の精神とみなし，前者を虚妄としたのである。

言語をイドラとする見方はイギリス経験論の全系譜に支配的勢力を占めるものでないが，ドイツ哲学のロゴスの見方と正反対である。λόγος, Lógos はギリシア人においては，それによって言語内の思想が表現されるところの言葉，あるいは推理の意であった。ラテン人はさらに拡大して Ratio 比，計算，理性の意に用いた。理性は最高存在，真理を意味していた。ベーコンにおいては言葉は虚偽であるがドイツ哲学においてはどの哲学者にも共通して言葉(ゴロス)は真理である。

ホッブズ (1588～1679) はベーコンのイドラを言葉の悪用，思考の間違った記録，比喩的使用，嘘言，論敵を負かす詭弁などとして受け継いではいるものの，言語をそれだけにとどめずその符号活動の面に重点をおき，ラテン語の Ratio 計算，演算機能に近づけている。言葉は符号としては思考の記録，想起，発言であり，帰納の面からみれば個別から普遍的名辞や命題をつくることにかかわる。その意味では人間の精神的諸能力は言葉によって生まれ，進歩させられる。

言葉はもの事を理解する understanding 機能である。「人があることばをきいて，そのことばの語および語の結合があらわすようにさだめられた諸思考をもつばあい，かれはそれを理解したといわれる。理解とは，ことばによって生ぜしめられた概念にほかならぬからである。[3]」 イギリス経験論において知識は感覚から出発して悟性（理解）に終わる。ヘーゲル哲学のように思弁的弁証法的理性 Vernunft が悟性の上位に立たないから understanding は悟性 Verstand にほかならない。ところで悟性は思考規定からすれば，ものごとを区別や同一性で考える能力，精々よくてもカントの解決できないアンチノミーにまでしか至り得ない能力「自分自身でおちいった矛盾の解決を

自分自身でなしとげることに絶望する[4]」「硬化した叡智」（シェリング）である。区別立てにおいて，対極において，否定と肯定の対立においてする思考形式である。このような思考段階の法則には形式論理学の無矛盾律が当てはまるのである。このような無矛盾律の思考規定は言語，言表，命題文のなかに定着され得る。ヘーゲルの言語観で詳述するようにヘーゲルにとっては言語は悟性の思考形式なのである。イギリス経験論には悟性以上の認識思考が存在しない以上，understanding とは言語のことに外ならない。そしてこの観点からは奇しくも論理実証主義が流れ出すのである。

「語はかしこい人々の計算器」「心のなかに構想されたものごとのなりゆきの計算を，名称の計算に転化する。」「推理は，われわれの思考を記号づけあらわすための協定された，一般名辞の，連続の計算にほかならない。わたしが思考を記号づけるというのは，われわれ自身で計算するばあいであり，あらわすというのは，われわれの計算を他人にしめし証明するばあいである[5]。」

この辞句は決して当代の記号論理学者が述べ立てているのではない。

「真偽はことばの属性であって，ものごとの属性ではない。そして，ことばがないところには，真実も嘘偽もない[6]。」これを言明しているのはウィトゲンシュタインでも，ラッセルでも，カルナップでもない。ほかでもないホッブズである。ウィトゲンシュタインは言う，「同意反覆文の真理は確実である，文のそれは可能であり，矛盾のそれは不可能である[7]。」ラッセルは述べる，「真と偽は，私的な意味での場合を別にすれば，文章の属性である……[8]」カルナップは書いている，「事物世界を受け入れることは言語のある一形式を受け入れること以上の何ものでもない……[9]」

ホッブズの言語観のなかにすでに，後に大きく成長発展してドイツ古典哲学の正統とは別個のコースを独走する論理実証主義の源流がある。

ホッブズの真理論は**ロック**（1632～1704）に延長される。「真理とは……符号によって指示される物が相互に一致しまたは一致しないに従って，その符

号を結合し，または分離することを意味するに他ならない。[10]」真理は本来命題にのみ属する。彼は命題を心の命題と言葉の命題の二種類に区別してはいるものの，心の命題は言葉の命題に還元される。何故ならば彼が『人間悟性論』(1690) でホッブズの記号理論をさらに徹底させて記号・符号を内面的観念の外面的なものとして，つまり観念の符号として摑み，この符号についての，言語外被 (マルクス) についての科学を打ち建てようと企てていたからである。すなわちホッブズの符号観はロックにおいて極点に至って記号論 semiotics と成った。ロックは人間科学を三つに分類する。物の性質・関係・働きを扱う自然学(フジカ)，人間の行動を扱う倫理学(プラクチカ)，この両者と区別して知識の獲得，伝達方法と手段を扱う *Σημειωτική* の領野を定めた。もともとこのギリシア語は最初は医学の症候学で用いられたもので，符号，兆候，標(しるし)という意である。彼は主張する，「……知識の偉大なる道具としての観念と言葉の研究は，人間の知識をその全範囲にわたって見わたそうとする人の考察の決して軽視すべからざる部分をなすのである。[11]」プラグマチストのパースはロックからこの術語を借用した。さらにモリスが記号の一般理論として仕上げた。

思考は一種の計算にすぎないというホッブズのテーゼは大陸の**ライプニッツ** (1646～1716) に影響を与えた。彼はロックに先立って人間思想のエレメントとなる一種のアルファベットを考案し，そのアルファベットの文字の結合とその文字から出来た言葉の分析とによって，すべてのものを発見したり判断したりしなければならないという計画を立てた。『結合法 Ars combinatoria』(1666) である。後に，対象一般の形式もしくは法式とその相互の関係とを適当な記号で表示する彼の『普遍記号学』と「推理計算法」とが合して記号論理学が誕生してくる。数学的方法と論理学が合体したのである。彼はここで機能 functio という概念を歴史上初めて使用しているのである。ライプニッツの本領は20世紀に入ってから発揮されていると言って過言ではない。サイバネティックスの創始者N・ウィーナーはライプニッツの『普遍記号学』

と推理機械 machina ratiocinatrix の構想の故にこの科学の守護聖人に数えているのである。しかし当時ライプニッツの記号学 charakterologie はドイツ古典哲学の言語観の正統となるものではなかった。だがヘーゲルは彼の『普遍記号学』，ヤコフ・ベーメの『事物記号論 De signatura rerum』(1622) とフンボルトの『二数論』に注目していた。

註 (1) ベーコン『ノヴム・オルガヌム』河出世界大思想全集6　アフォリズム16
(2) 前掲書　アフォリズム59
(3) ホッブズ『リヴァイアサン』上　岩波文庫　79ページ
(4) ヘーゲル『小論理学』上　岩波文庫　79，117ページ
(5) ホッブズ　前掲書上　79ページ
(6) ホッブズ　前掲書上　71～72ページ
(7) L・Wittgenstein : Tractatus logicophilosophicus. Aphorismus 4.464
(8) ラッセル『人間の知識――その範囲と限界――』みすずラッセル選集9巻 175ページ
(9) R・Carnap : Meaning and Necessity. A Study in Semantics and Modal Logic. Chicago. Phoenix Books 1964 p. 208
(10) ロック『人間悟性論』上　岩波文庫　112ページ
(11) 前掲書下　239ページ

三

イギリス経験論の言語観の根本概念は機能（函数）概念である，これが言語を数理計算，記号の結合，その操作という考えに導き，記号論，意味論，数理哲学の発達にルートを切り開いたのである。これに反してドイツ哲学のそれは実体概念で，言語は民族精神の活動，自己意識活動としてつかまえられる。

カント，フィヒテ，ヘーゲル，シェリングの一連のドイツ観念論哲学者の中にあって言語哲学を確立した人は，18世紀の啓蒙期から19世紀のドイツの国民意識の昂揚期を迎えていたフンボルトであった。そして彼の言語哲学形

成にあずかって力あった哲学者はヘルダーとフィヒテである。

フィヒテ (1762～1814) はナポレオンのライン河渡河によるドイツのフランス化に抗して，ドイツ国民意識をふるいたたせるかの有名な『ドイツ国民に告ぐ』(1807～1808)の第4第5講演で彼の言語観を開陳した。

フィヒテの言語観の最大の特徴点は，言語のなかに国民の感覚的および精神的生活の全体が定着されているということである。言語は国民生活の歴史全体の中から必然的にでてきたものである，否，この言語がそれを産みだした民族の発展全体にはかり知れない影響を及ぼすのである。言語はその共通性によって社会集団全体の成員に共通の理解をもたらし，成員を結びつける紐帯となる。言語は感覚の世界と精神の世界とが交互に交流するための接合点，人間と人間とを結ぶ媒介者である。しかし媒介は機能としての機械的な媒介ではなく，それ自体がその社会や民族の本質をなす媒介である。彼によれば，国家とは単に地理的境界による外的規定のことではなく，同一の言語を話す人間集団，共通の言語によって自然必然的に結び合わさっている集団全体である，共通の文化と理解とをもつ一民族である。言語はある民族に固有する特定の言語であって，それが民族の性格をも規定する。ドイツ民族の性格を形成するのはドイツ語である。生きた言語とはその民族の中で働いている言語，その民族の具体的気質をもっている言語である。死んだ言語とは外来の言語である。言語は単なる符号，記号，概念の集合のことではない。創造する力である。「言語というものが人間によってつくられる以上に，はるかに人間というものは言語によってつくられる……」[(1)]

フィヒテにおいては言語はイギリス経験論のように出来上がった，したがって活動しない既成物ではなく，一つの活動する力である。フンボルトの言語観のところで詳述するように力という概念は一つの実体概念である，しかし悟性的な実体概念である。言語の力は発現しなければならない，精神の中に発現されるのである。

後述するように，既成言語のなかに定着されている知識が人間の対象化活

動によって得られた認識思考の成果であることが忘れられると，言語と思考とが同一視される。その時その既成成果を色いろと加工したり結合したりすることによって新しい知識が得られるという見解がでてくる。フィヒテにおいてもイギリス経験論と同様に，力の概念自体が悟性的水準の思考規定であるのだから，言語形式の知識が思考形式の最高形式として受け取られる。「将来いかなる超感覚的な認識が可能なりやということは，言語全体の中にすでに定着されている超感覚的認識と感覚的認識全体の関係にもとづいて決定されるであろう。[2]」ヘーゲルにはこのような論理はない。ヘーゲルには実証主義的論理はない。

言語のなかに定着されている成果は，実は認識主体の対象化の成果である，対象化は物的形象を取らざるを得ない，物象化される。言語は観念そのもの，概念そのものでは決してなく，思想や思考の外被，「思想の直接的現実性」(マルクス) である。観念や概念が生じ得るのは言語が認識主体とかかわってのみにすぎない。成程，フィヒテの自我は精神であり非我は物自体であるから，「言語は，超感覚的な対象，超感覚的な機関〔自我〕内における在り場所を，表徴的に暗示するものである。[3]」しかし成果としての言語自体が認識するのではない，認識するのはあくまでも人間主体である，思考するのはあくまでも人間頭脳である。論理実証主義は主体の活動とその所産とを分裂においてとらえるが故に，既成言語の一方のみを，活動の所産のみを研究対象として，主体の認識思考を忘却する。ウィトゲンシュタインの「私の言語の限界は私の世界の限界である」(Aphorismus 5・6)というテーゼに示されているように論理実証主義は記号や言語の世界から一歩も外に出ないのである。ヘーゲルの弁証法はフィヒテやフンボルトにみられる悟性的な力の概念による言語把握ではない。悟性は認識思考の一モメントであって最終にして最高の思考形式ではない。

ヘルダー (1744～1803) はフィヒテより前に『言語の起源についての論稿』(1772) でドイツではじめて言語哲学に着手し，フンボルトに大きな影響をの

こした。言語と世界観との関係でヘルダーは貴重な思想を展開し始めていた。まず第一に言語を観念の符号にすぎないとみる一種の道具主義や成果のみを利用する功利主義と違って，思考の「宝庫」の形式，思考文化の形式，世界観の形式とみるのである。世代の経験，知識はまさしく言語のなかに蓄積されて次の世代に引き継がれる，その世代は教育過程の中で言語を通して先代の経験，知識体系をつかみとる。言語は国々によって異なる故，ある民族の言語はその民族の体験，知識体系を母国語でたくわえているはずである。それぞれの国民は己れの母国語でもって思考する。言語の中で思考する，思考する如くに母国語で語る。民族の言語にはその民族の知識体系と思考文化体系が蓄積されている，この意味で言語はまた世界観 Weltansichtを形成している。

言語は「学の形式である。ただ言語の中で思想が形成されるだけでなく，それによって思想が形成される。[4]」言語は形成する創造者，人間の全認識に限界と輪郭とを与える形成者である。ヘルダーの特徴点は，ある民族の財産である言語体系が，単なる言語物質という道具（ロック）ではなく，民族の構成員の世界観を形成する創造者であるということである。彼は母国語の体系と民族の資質とを結びつけていたがフンボルトのように民族精神という概念までには到りついていない。[5]

フンボルト（1767～1835）は，フィヒテ，カント，ヘーゲルの影響を強く受けて，ヘルダーの説いた言語の世界観形成の役割を力の概念によって論拠づけた人であった。彼は言語の符号・記号的把握――言語の多様性をその民族の音声や文字の多様性とみる把握――を言語研究にとって有害な見解であると弾劾する。世界観や人間形成に無縁な研究は本来の言語研究のあり方ではない。「言語研究の真の眼目は，言語が表象形成に参与する点にある。このなかに一切合財が含まれている。というのはこの表象の総体が人間をつくるものであるからである。[6]」人間は言語を紡ぎ出す，このことによって人間は自己を紡ぎだすのである。言語に過大な創造力が課せられ人間のその他の実

践活動は過小評価される。つまり言語に世界を変革する創造的要因が課せられる。言語は死せる所産物 ein todes Erzeugtes ではない，成果ではない，むしろ産出活動 Erzeugung である。「言語は既成の成果 Werk ではなく一つの活動 Tätigkeit である。エルゴン ergon, εργου ではなくエネルゲイア energeia, ενεργεια である。」(7)

フンボルトの言語は精神的に実体化されてくる，言語において人間全体が働き，言語によって人間性が紡ぎ出されてくる。言語の内的形式とはまさしく創造する力であり，この力が言語に内在している。彼にとって言語が世界観であるのは，どの概念も言語によってつかまれる故に，世界の広さと匹敵するという単純な理由によるのではなく，言語による諸対象の変革が，世界と概念との不可分な連関を精神に洞察せしめるからである。

言語はエルゴンではなく，エネルゲイアという形で把握される時，アリストテレスの質料と形相との関係が想い起こさずにはいられない。彼は質料が形相によって規定され，息を吹きこまれ，それによって実現されていく，この実現の作用をエネルゲイアと規定していた。言葉はただ純粋に精神現象そのものではない，何故ならば精神は具体的な感性的対象物ではないからである，と言って言葉は普通の事物や商品ではない，人間の精神活動，思考文化と直接つながっているものである。アリストテレス流に言えば，質料でも形相だけでもない。また言語は，フンボルトにあってはヘーゲルの世界精神でも絶対理念でもない。この点でフンボルトの言語は対象的感性的形式をもつ創造力，物的形式をもつ実体，だがヘーゲルからみれば力という実体，したがって悟性的概念の実体である。(8) 力はまさに発現そのものである故に，言語力 Sprachkraft は民族の精神，民族的生命として発現・発露する。

言語は，フンボルトにあってはまた民族を形成する力である。言語は国民 Volk の所産であり，かつ国民の中で働く精神力である。ヘルダーの言語観同様に，母国語はまさしくその民族の世界観と国民性を形成する創造力である。「語は民族精神の外的発現と同じである。言語は民族の精神であり，その精

神はその民族である。両者を同一にせずしては十分に考えることはできない。[9]」それぞれの民族が世界を把握する仕方に応じてその言語もまたそれ独特の性格をもつ。彼の思想は明らかにドイツ国民意識の昂揚の反映，後進国ドイツの精神上での先進性であった。人間活動の独特の形式である言語をあたかも唯一の世界の変革力と見るフンボルトの理解は決して唯物論のカテゴリーに入るものではない。

ヘルダーやフンボルトの言語観は20世紀に至ってカッシーラーの思想にはっきりと受け継がれている。[10]彼は神話，宗教，言語，芸術，歴史，科学すべてシンボル形式の世界とし，これが人間そのものを形成していると考えたのである。そしてカッシーラーのシンボル哲学はランガーへと系譜を延ばしている。

註　(1)　フィヒテ『ドイツ国民に告ぐ』河出世界大思想全集　哲学・文芸思想篇11　233ページ

(2)　前掲書　237ページ

(3)　前掲書　235ページ

(4)　J・G・Herder : Fragmente über die neure deutsche Literatur. Herders Werken. Berlin Teil 19 S. 340

(5)　ob. Adam Schaff : Jezyk a poznanie. 1964 Warszawa str. 17

(6)　Humboldt : Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues. Gesammelte Schriften. Bd. 6. Häfte I Berlin 1907 S. 119

(7)　ibid., S. 119

(8)　参照せよ　ヘーゲル『精神現象学』　河出世界大思想全集12　85～108ページ　『小論理学』　岩波文庫　§ 136～§ 137

(9)　ob. Adam Schaff : ibid., str. 21

(10)　E・カッシーラー『人間』　岩波現代叢書　53ページ

四

言語は活動する精神の自己疎外，外化であり，言語形式における思考規定は悟性 Verstand であるというのが**ヘーゲル**(1770～1831)の言語観である。

『精神現象学』(1807) と『精神哲学』(1817) で論述されている言語の哲学的分析は神秘的装いをまとってはいるものの，そこには大変貴重な思想遺産がある。自己疎外の論理である。

ヘーゲルによれば自己意識が己れの本質を外化し，外化された世界は自己疎外された世界として自己意識に対置する，この世界を我がものとすること，廃棄することによって疎外された世界は自己自身に復帰し，より高度の存在形式を得る。即自 an sich は対象化されて向自 für sich となり，それが止揚 aufheben されて即自且向自 an und für sich となる。この自己疎外する意識活動の第一の段階の活動は対象化 die Vergegenständlichung（ヘーゲルにおいては疎外も外化も同じであるがマルクスにおいては両者はそれぞれ別の意味をもつ）といい，第二の自己に復帰する活動，つまり疎外を廃棄する活動，世界を我がものとする活動[1]を，マルクスの用語を用いるなら対象性剥離 die Entgegenständlichung という。

言葉は自己意識の疎外態，自己疎外精神の対象化，外化，定在である。「……言葉は，自己としての純粋自己の定在であり，……言葉は，自我をその純粋な姿で含んでおり，言葉だけが，自我を，自我そのものを表現している。自我のこの定在は，定在としては，自らの真の本質を含んでいるような一つの対象態である[2]。」

ヘーゲルにあっては自然は精神の疎外，外化，対象態であるように，言語は自己意識の疎外態である。「人間は分節をつけた言語を創造する。そして内面的感覚は分節をつけた言語によって言葉を獲得し，自分の全体的規定性のなかで外化され，主観に対して対象的になり，且つ同時に主観に対して外面的になり疎遠になる。それ故に，分節をつけた言語は，人間がどういうふうに自分の内面的感覚を疎外するかを示す最高の様式である[3]。」

無論のこと主観的観念論の立場にあったヘーゲルは精神活動を事物の矛盾を解決する決定的役割として見ずに規定的役割として見たので，絶対精神が自然を，自己意識が言語を産みだすという顚倒した思想をもっていた。マル

クス主義の哲学においては人間実践が，社会的生産的実践があくまでも規定的であって思考や精神が客観的実在を産出するのではない。しかし客観的実在——社会的・自然的現実——の反映としての思考は決して受け身ではなく，生起する矛盾を解決する役割を果たし客観的実在としての実践にオリエンテーションを与えるのである。(4)

言語は認識主体の活動形態の活動客体への転化形態，対象化物である。何故ならば，活動は対象化の活動であって，いかなる客体にも体現もされなければ，いかなる素材においても実現されないような，何物にも結晶化されないような，一切の対象を欠いた無対象的活動というものは全く不可能である。人類の一切の活動は色々な対象的物体，機械や芸術作品等々に具現されている。言語はその例外ではない。すなわち対象化は必ず物象化 die Versachlichung, die Verdinglichung として現われるのであって，例えば労働活動は商品という生産物のなかに対象化される。人間の認識思考の活動は言語形成物の中に定着される。対象化とは人間のおちつかない活動性の形態がおちついた存在形態に移り行く過程である。対象化によって産み出された労働生産物のその後の運命は，それが消費されてしまうか，それとも再度加工を受けて新たな生産物になるかである。前者の場合は既成品として利用されることであるが，後者の場合は過去の死せる労働が再び生きたものに蘇えって新しい発展形式を獲得することである。言語という生産物もこれと同じ運命をたどることができる。既成品知識として利用されれば常識（日常悟性）であり，言語の対象性を剥離して過去の精神活動を蘇らせ，認識思考において我がものとされ，新しい知識生産へのモメントとなるならば理性，創造的理性 Vernunftである。後者の過程をヘーゲルは疎外の廃棄，止揚と呼び，自己自身への復帰，an und für sich の世界，論理学よりみれば思弁的肯定的理性である。

対象化過程と疎外の止揚の過程の弁証法はヘーゲルにあっては絶対理念の闊歩であるが，マルクスにあっては対象化過程と対象性剥離との対立物の統

一，つまり人間活動の総体である。

ヘーゲルにおいても対象化と疎外の止揚とはそれぞれ他者の遂行を前提し合っている。対象化とは活動の用具を我がものとすることにおいてしか対象化できないから対象性の剥離でもある。また逆に対象性剥離は諸対象抜きで観念王国に舞い上がることとして行なわれるのでなく，再対象化として，以前の活動形態の再体現として行なわれるのである。したがって新たなる対象化に向かってのみ，ある活動形態の対象性を剥離し，我がものとすることができる。これが人間の創造的活動である。

対象化の独特の形態は，その高度の発達によって分岐した形態，つまり言語におけるそれである。言語は同じ物でも労働生産物と異質の特性をもっている。言語は活動のもつ未来の対象化を自然の物材において媒介する，だが，それは未来の所産たる「観念的存在」を言葉，シンボル，記号などの物質言語において対象化することによってである。観念的なものは一旦誕生すると間髪をおかずに言葉の担い手である記号・シンボル・符号に物質化される。[5] サイバネティックスの術語で言えばコーディングされる，対象化の概念からすれば情報 information は人間においては思考の秩序あるコードである。情報概念は思想の伝達，コード変換の数学的技術的処理にとって極めて重要である。

新実証主義は認識思考活動を言表，表現文，記号の集団と同一視する，ここから記号，情報を操作することによって新しい知識を産みだそうと企てる。なるほど科学的知識は本や録音装置のなかに表現されざるを得ないが，このことをもって言語の世界が知識の世界であるということにはならない。

ヘーゲルは言語を für sich の階梯においていることは言語は概念の表現であるという単純な規定に満足するものでないことを語っている。問題は思考規定や論理形式からして言語がいかなる段階にあるかである。ヘーゲルは言語を概念的に把握された精神，思弁的思考——思弁的とは弁証法的というと同じ——としてはみなしていない。絶対知ではない。自ら矛盾を定立しそ

れを解決していく思考でなく，矛盾を避け，区別と同一性，対極性と解決できないアンチノミー（カント）の思考世界，常識の世界，一口でいえば悟性〔分別〕の世界である。悟性は対象の静止的統一を固執する[6]，抽象的同一性，区別立て，分けへだてを要求する，矛盾は悟性にとって存在してはならない危険物である。矛盾的一体を概念的に把握できない思考形式である。

主観的なものと客観的なもの，主観的精神と客観的精神の統一において絶対精神は成立するが，ヘーゲルが言語を論じているのは主観的精神の場所である。「主観的精神の産物は……言葉である」「言語における形式的なものは，自分の諸カテゴリーを言語に作り入れる……悟性の仕事である[7]。」

対象性剥離の全くない世界，したがって対象化もない世界，疎外態のままでとどまっている静止の世界，これをわれわれは科学領域における疎外現象と名付けよう。この世界は悟性一色の世界，無矛盾律が支配し理性に暴力を加えるよそよそしい世界である。論理実証主義の世界はこの疎外の世界であって，認識主体の対象化された言語物質そのものしか見ない。弁証法的理性がこの疎外によって畸型化された理性，つまり悟性に落ちぶれているために，言語の経験的世界のみをこの現実の世界とみる。言語は所与の知識，それ自体で知識となる，ちょうど金が貨幣であるのは金の自然的属性の故と考えているように，言語物質そのものが言葉であるが故に知識とみられる。この世界では矛盾は言語の中での自己矛盾であって，あってはならない矛盾，区別立てにおけば消えてなくなる矛盾である。矛盾は遍在的普遍的カテゴリーではなく，現実に存在しないものなのである。矛盾は区別に，対極性に，否定・肯定の形式的アンチノミーに還元される。この世界では発見の科学は言語批判，エセ問題をただす言語分析となる。「哲学の課題は意味論的分析である」（カルナップ）。

この世界では，常識（悟性）の持主が金を偶像として崇拝するように，言語を異常な魔力をもつものとして崇拝する。言霊（ことだま）崇拝が科学上の疎外において存立するのである[8]。

ヘーゲルは疎外態としての言語でストップしたのではない。彼はこれを思弁的肯定的理性において観念的に，思考の上で止揚しているのである。

疎外の論理で宗教の言霊(ことだま)崇拝を唯物論的に批判したのが**フォイエルバッハ**(1804～1872) であった。彼は『キリスト教の本質』(1841) と『宗教の本質』(1845) で言語崇拝が生じる顚倒の論理を解き明かしている。

彼は，神は人間の自己疎外されたものと洞察した。人間は自らの本質を対象化する，この対象化されたものは自立的なものとして人間に疎遠なよそよそしい力として対置する。神の言葉は人類を支配する，宗教は人間を支配する。これが宗教疎外の秘密である。実は宗教の本質や意識のうちにあるものは，一般に人間の本質のうちにあるもの，人間が自己自身と自然についてもっている意識のうちにある以外のなにものでもない。しかし宗教が宗教として，神が神として人間に存在し得るのはこの疎外態が人間によって我がものとされないで対置している場合である。

神の言葉は人間の言葉の真の本質であるのに何故人間は神の言葉を崇拝しなければならないのか。フォイエルバッハによれば精神は言葉において発現し，普遍者になり，今度はそこから世界が創造されるという顚倒である。「精神は言葉においてのみ，もっとも精神的な，それにもっとも相応しい仕方であらわれる。……精神としての精神は言葉を通じてのみ発動し，これを通じてのみ脱却して世界，現象のうちに姿を現わすのである。[9]」短縮記号や略号を用いるのは直観を概念に，具体的なものを抽象的なものに，多者を一者にするためである。このような一般化，普遍化の本性は言語に横たわっている。精神の活動性は言語の活動性のように見えてくる。ここに顚倒が生じる，思想の対象化であったはずの言語が一つの世界をつくる。「言葉は革命的な力をもち，言葉は人類を支配する。[11]」今度は言葉を通じて事物が発現してくる，事物が存在する故に考えられるのでなく，言葉が存在するので事物が存在すると考えるようになる。

言語の疎外態は「最初に言葉ありき」となって極点に達する，宗教は神の

言葉を通じて世界を発現させる。異教徒は感性的対象物を崇拝する（自然崇拝），だが一神教のキリスト教を信奉するキリスト教徒は言葉という形像（ビルト），抽象体を崇拝する（言語崇拝）。

フォイエルバッハは宗教批判の形でではあるが，言語の物神崇拝の発生のメカニズムを哲学史上初めて開示したのである。人間の自己疎外活動，とりわけ精神活動の言語への対象化過程に言語崇拝の自然必然性を洞察した。

科学上，イデオロギー上の疎外現象が真に唯物論的且弁証法的に解明されるのはマルクス主義を待たなければならない。

註 (1) ヘーゲル『精神現象学』　前掲引用書　284, 287, 441ページ

(2) 前掲書　294ページ

(3) ヘーゲル『精神哲学』上　岩波文庫　188ページ

(4) см. Тодор Павлов : Теория на отражението—основни въпроси на диалектико-материалистическата теория на познанието—. Избрани произведения. том 5 София. 1962 стр. 580, 588

(5) см. Г.С. Батищев : Противоречие как категория диалектической логики. Москва 1962 стр. 12-17

(6) 参照せよ　ヘーゲル『小論理学』上　239～258ページ

(7) ヘーゲル『精神哲学』下　80, 137ページ

(8) см. Г.С. Батищев там же стр. 52-61

(9) フォイエルバッハ『宗教の本質』下　創元文庫　186ページ

(10) フォイエルバッハ『キリスト教の本質』　河出世界大思想全集　哲学・文芸思想篇12　103ページ

(11) 前掲書　104ページ